

妻籠宿本陣

身分の高い人々のための宿

本陣は、中山道にあった大名、公家や幕府の高官などが宿泊した最高水準の旅館でした。この本陣は、16 世紀から 19 世紀まで、島崎家が勤めており、島崎家の分家が馬籠の本陣を勤めていました。明治維新が木曾地方にもたらした社会の大混乱を題材とした有名な歴史小説『夜明け前』を書いた島崎藤村は、この本陣の当主の弟でした。

この建物は、1995 年に復元されたものです。この建物は、江戸時代後期の間取りと、全国に存在する数軒の本陣の間取り（内部に展示）のふたつを参考にして設計されました。江戸時代初期に建てられた当初の建物は、道路に面していました。ご覧のとおり、江戸後期の建物には、正面に防火帯としての役割を主な目的とする中庭がありました。

この建物にはふたつの機能がありました。島崎家は、天井がより低く全体的な規模がより小さい左側部分に住んでおり、宿泊客は、右側部分に宿泊していました。宿泊施設部分の中で特に興味深いものは、大名が就寝した上段の間です。この部屋の床は、この家の中のどこよりも高くなっており、宿泊者の高貴な身分がわかること、書き物机のある床の間があること、そして、廊下に囲まれているため、攻撃されても防御しやすいことという 3 つの特徴を備えていました。